

デザインと 心理学

1 アフォーダンスの心理学—生態心理学への道

エドワード・S・リード

2000 新曜社 四六判変型 5040円

機能のマッピングでは片づかない私たちの行為の調整や発達をどのようにして心理学で扱うか。ダーウィンのミニズの観察をはじめ、生き物の行動の観察を手がかりとしながら、リードのこの本は、「(サイコロジカルなこと)の地平」へと説く。原題は“Encountering the World”。私たちはこの世に生を受けたときからずっと、環境と接触し続けている。そして絶えざる内的な変化、外的な変化を柔軟に受け入れながら行為を調整し、取り囲む環境を生き延びてゆく。知覚と行為のシステムがいかに私たちを生かしているかをあらためて味わうことのできる一冊。



2 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る

J・J・ギブソン

1985 サイエンス社 A5判 4384円

不案内の駅を歩いている。向こうからバスがやってきたので顔を向けると、バスが来たほうの道の見え方に見覚えがあることに気づく。その瞬間、今まで歩いてきた景色とこれから歩いていく景色、そしてその周囲とがある広がりをもつ場所としてつながり、自分が「ここ」にいることがわかる。私たちは、光の配列の変化のなかからあらわになる不变項を知覚し、例えばこのように定位に関する情報として利用している。視覚表現が「形のない不变項」を伝達するというギブソンの視覚論は、真にオリジナル、かつエッセンシャルなものに思われる。

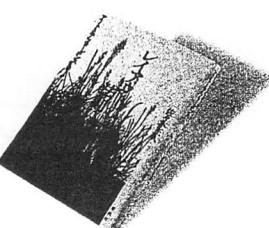


3 レイアウトの法則—アートとアフォーダンス

佐々木正人

2003 春秋社 四六判変型 2415円

上で紹介した「生態学的視覚論」はまず、我々生き物が棲息している環境について記述することから始まる。はじめは少しとまどうのだが、読み進むにつれて、取り囲む環境とそこを満たす光（包囲光）こそが私たちの視覚を可能にしている根拠であることがわかってくる。環境はさまざまな面によって構成されている。面には肌理があり、それぞれレイアウトを持って入れ子になっている。このレイアウトのプロフェッショナルである、写真家・畠山直哉、建築家・塙本由晴、デザイナー・鈴木一詮らとの対談を中心に、我々の視覚的具体に迫る本。



4 デザインの生態学—新しいデザインの教科書

後藤武ノ/佐々木正人/深澤直人

2004 東京書籍 A5判 2310円

本書中の言葉を拝借すれば、既知で未知だったことを発見する喜びで、アートやデザインと心理学はつながっている。知っているとは思っていないことに私たちの知覚システムはすでに接觸している。そして身体は調整を行い、日常の行為を達成している。私たちは何を見ているのか。デザインとはどのような行為か。この本のどこから読んでも知覚—行為—デザインの実践について、言葉に寄り添いながら思考を経験することができる。「新しいデザインの教科書」という副題のとおり、内容のみならず、脚注やキーワード解説、読書案内も充実している。

5 誰のためのデザイン?—認知科学者のデザイン原論

D・A・ノーマン

1990 新曜社 四六判 3465円

日常生活のなかでの配置やかたちがもっている意味に、ふとした拍子に気付いてしまったこと。例えばどこが開くのかわからないドアに遭遇して、ふだん何気なく開閉しているドアのデザインの妥当性に改めて気付いたり、ノブの形状や位置のバリエーションを意識するようになったこと。誰もがもち得るそんな経験に、認知科学の観点からアプローチしている。一人のユーザーとして、デザインに求めることは誰にでも分かりやすく使いやすいだけではないが、考えるきっかけを提供してくれるインターフェース・デザインの古典とも言える一冊。



6 色彩の心理学

金子隆芳

1990 岩波書店 新書 840円



他の5冊とかなり趣の異なる本ではあるが、色の見え方を扱った心理学のトピックを読みやすく紹介している本の一冊として挙げておきたい。本書は、色覚の機序ではなく、「どのように見えるか」という心理的側面に焦点を絞って、ゲーテ、シュヴァルツ、カツツの色彩論を軸に挿話を織り交ぜて展開されており、それぞれに興味深い。なかでもカツツの色の見え方の様相の分類は、色の見え方を現象に忠実に記述することによって、表面の肌理やかたさ、面の重なり方、空気や水などの媒質の拡散といった環境の記述となっている点で示唆に富む。

選・文 堀口裕美

Hiromi Horiguchi

1971年東京都生まれ

武蔵野美術大学講師

主な著書

『生態心理学の構想—アフォーダンスのルーツと尖端』

(佐々木正人ほか分担執筆・翻訳、

東京大学出版会、2005)

『アートのアフォーダンス』

(分担執筆、東京大学出版会、

2006年刊行予定)

私たちは何を見ているのか。どのように見ているのか。それは心理学において、ずっと主要なテーマであり続けてきた。精神物理学、生理学、認知科学など、さまざまなアプローチで扱われてきている。視覚に限らず、我々の知覚機能と脳とのマッピングがここ数十年のあいだに技術の精緻化を伴って進められ、それによって知覚のメカニズムが解明されつつあるようである。しかし、こうした機能のマッピングだけでは、私たちは何を見ているのかという問いへの答えにはならない。私たちの知覚システムが日々環境の中で接していることそのものに迫る必要がある。私たちの身体は環境のなかを自ら動き、そして知覚システム(見るシステム、聞くシステム、触れるシステムなど)が機能する。そのなかで私たちは周囲に備わっている価値や意味を見いだして、それらを利用しながら生きている。デザインについて考えるにあたっても、このような観点はひとつの手がかりとなるだろう。

1910-

ロシア・アヴァンギャルド

ロシア革命前から始まる。抽象絵画とタイポグラフィ、フォトモンタージュ、建築、映画で革新的表現が誕生。スターリンの台頭により終息。

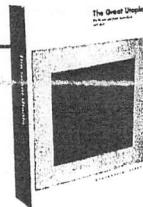


「ロト・テンコの実験室」

ワタリウム美術館 1995

16×21.5cm 3568円

フォトモンタージュ、抽象画、タイポグラフィ、ユーモラスなイラスト、衣装デザインなど、前衛表現のデパート、ロト・テンコの仕事を紹介



「ロシア・アヴァンギャルドのデザイン

—アートは世界を変えるか】

海野 弘 2000 新曜社 A4判

2310円

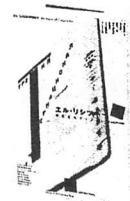
人の名前がややこしくて全体像がつかみづらいロシア・アヴァンギャルドが簡潔な文章でまとめられている

『THE GREAT UTOPIA: The Russian and Soviet Avant-Garde, 1915-1932』

1994 Solomon R. Guggenheim Museum

23×30.5cm

1992年NYのグッゲンハイム美術館で開催の伝説的展覧会のカタログ。ソ連崩壊後、西側初公開作品を含む決定版の内容



「エル・リシツキー

構成者のヴィジョン】

寺山祐策 2005 B5判

武蔵野美術大学出版局 5880円

ロシア構成主義の先駆者のタイポグラフィ作品を中心に紹介。多面的に切り込む論文や座談会、豊富で貴重な図版で満腹感あり

1917- デ・スタイル

1917年に始まるオランダの芸術運動。三原色と矩形のモンドリアン抽象絵画。建築・家具はリートフェルト。

「バウハウス叢書

新しい造形】

モンドリアン 1991

中央公論美術出版

B5判変型 4587円

デ・スタイルの思想と実践をリードしたモンドリアンの論文集。なぜ抽象か。建築と絵画の関係など先駆者による前衛の原点



1909 マリニエッティ「未来派宣言」
1908 T型フォード発売
1907 ドイツ工作連盟結成

1895 ピンク・パリに
アール・ヌーヴォー開店

1889 パリ万国博のためエ菲尔塔建設
1877 ウィリアム・モ里斯最初の講演
[織物芸術]

1851 ロンドン万国博のために
クリスタル・パレス建設

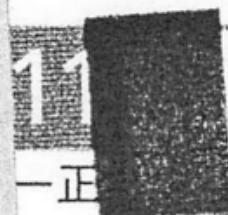
1900

1890

1870

1850

テ"サ"イ+一を読み解く义理書 BEST 30



一正



06
河北秀也

2

400

07